見えてますか？聴こえてますか？

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見えてますか？聴こえてますか？

【Ｎコード】
Ｎ１２５２Ｚ

【作者名】
月猫

【あらすじ】
わたしが見てきたもの、聞いてきたもの。すべてノンヒィクションです。
これは、わたしの幽霊日記。あなたにはこの声、聴こえていますか？この姿、見えていますか？

はじめに

初めまして。月猫（つきねこ）です。今から書くことは本当の事です。信じてもらえないかもしれませんが・・・。

わたしは小さい頃から、人には見えないものが見え、聴こえないものが聴こえます。何だかわかりますか？それは・・・。

霊です。

初めて見たのは、幼稚園の年長の頃。黄色い光が見えたのです。それからは少しずつ、姿や声がはっきりしてきました。小さい頃は恐怖以外のなんでもありませんでした。困ったものです。

どうしたらいいか、なんてわかりません。家族にも、親戚にも、そんな人はいなかったのですから。

そして、今も変わらず見えています。聴こえています。

これは、そんなわたしが今までに体験してきたことです。まったくホラーではないです。わたしの幽霊日記を見ていると思って読んでいただければいいと思ってます。

修学旅行先で

中学校定番の修学旅行先は京都、奈良。わたしもそうで、宿泊先は京都でした。
宿泊先は大変綺麗で、とてもいいところでした。1日目は、楽しくて楽しくて、もう大はしゃぎで・・・。わたしも何もかも忘れて楽しんでおりました。
　2日目。京都の自主研修がありました。班行動です。いろんな寺院を回り、クタクタになって帰ってきました。そんな時事件が起きたのです。部屋に入った時。なんとも言えぬ気配というか、雰囲気というか、を感じました。なんだろう？と思いつつ友達と、「疲れたね」とか「なんか綺麗だったね」と話していました。その時。
　「キャーーーーーーー」
という鋭い悲鳴が聞こえました。隣の部屋からです。わたしと友達はビックリして顔を見合わせ、部屋を飛び出しました。部屋の外には、同じクラスの子たちがたくさんいました。同じ階には、クラスの女子しかいません。部屋も3～4人部屋でした。みんなが集まっているその中心に2人の女子が茫然と立っていました。
　「どうしたの？」
私が聞きました。するとその子たちは、震えながら言いました。
　「窓のところから口笛が・・・」
　「やだ。こわっ」
わたしと同じ部屋の子が言いました。わたしは不思議に思い、口笛が聞こえたというその部屋を覗きました。そしてギョッとしました。そこにいたのは・・・。
女の人。白い服を着た、髪がぼさぼさの・・・。
　「怖い。うちら、何も見てないし、聞いてないから怖いよね」
わたしと同じ部屋の子が言いました。周りの子たちも怖がっています。本物が見えてるけどね、と思いましたが（笑）

「と・・・、とりあえずカーテン閉めて。窓の方に行かないようにしな」

と、わたしは言っておきました。クラスの子にも誰にも、わたしが見えることは言っていません。しかし、言っていたとしても見えたものは言わなかったと思います。とても不気味だったからです。このことで、修学旅行を怖い思いをさせるのは嫌だったからです。

きゅうりのおじさん

わたしが小学5年の時の話です。

その日、夕食中ふと前をみると・・・。なんと、兵隊さんが！けがしてるようで、頭などから血を流していました。もう、怖くてガクガクです。（笑）もしかしたら戦争とかで亡くなった方かな、と思いつつ、その日は寝ました。

その夜。夢を見ました。

ぼんやりとした白いような、灰色のような空間の中を見ているようでした。すると、あの兵隊の人が。

「ごめんね。怖がらせるつもりは無かったのだけど・・・」

兵隊さんが言いました。そして見えてきたものは・・・。海でした。

ふと気が付くと、わたしは軍艦の中にいました。

大砲の音。叫び声・・・。

その時。

ドカーーーーン

大きい音と、すごい衝撃を感じました。そして、ボンヤリとし・・・。

「おじさん、これで死んじゃった」

兵隊さんが言いました。

「喉がひどく乾いたよ。生前は、きゅうりが好きだから、きゅうりを食べたい」

兵隊さんは穏やかに言います。

「それからね、会いたい人がいる。その人が大切で、心配なんだ」

そう言い終えると同時に、私は目を覚ましました。兵隊さんが普通の優しいおじさんだったこと。大切な人がいると言っていたことに胸が痛みました。でも、会いたい人がいる、という願いは叶えてやれそうになくて・・・。

急いでこの事を親に言い、その晩はきゅうりをお供えしました。新

しいトゲがチクチクのやつ。
どうして自分にしか見えないのかととても苦しく思っていました。
そんな気持ちは、現在だってかわってません。幽霊は苦手です。でも。どうか兵隊のおじさんが少しでも救われます様に。素直にそう感じることができた出来事でした。

きゅうりのおじさん（後書き）

初めまして。白猫（しろねこ）です。はじめに、のところであいさつしましたが、改めてさせていただきました。見えることで、聞こえることで、苦しんできたこと。だからこそ、知った事、楽しいと感じた事。たくさんありました。ここでは、そんなことを少しずつ書いていきたいです。見える人、そうでない人にも何かを伝えられたら、と思っています

トントンゲーム

私が中学1年生の時の話です。中一の冬で転校しているのでその前の話ですね。そのころは、学年の子のほとんどがわたしが霊感が強いことを知っていました。その頃に部活の子たちの間に流行ったのが、「トントンゲーム」です。これは、輪になって最初の子が隣の子の肩を叩きます。一周回って、最初の子が叩いた回数と同じ回数でてきたりしないだろう、という簡単な気持ちでゲームをやっていました。ところが、わたしのところから、いつも回数が変わるのです。最初は、勘違いかとも思っていましたが、やはり違うのです。それに、段々具合が悪くなっていました。そして、周りの子もわたしの事を気味悪く思うようになりました。次第にこの遊びはしなくなっていきました。

このような遊びは、本当に寄せ付けます。みなさんも注意してくださいね。

追われる

引き続き、中学1年、転校する前の話です。
ある日から、何やら見られている気配を感じました。授業中、休み時間、帰る時、お風呂に入る時、寝る時・・・。落ち着かない生活が1週間程続きました。段々と気味が悪くなってきて、気配がしたらすぐにその方向を見るようにしました。そんな日々が3週間ほど続き・・・。ついに正体が分かりました。分かったのは、部活からの帰り道。後ろから気配を感じて、振り向きました。すると、電柱の陰から女がこちらを見ていたのです。髪が長く、全身真っ黒の服。黒い傘を持っていました。何だか、他の霊とは違う何かを感じました。一層怖くなりました。
そして数日後。帰り道でその女の人と目が合ってしまいました。しまった、と思いました。これはやばい、と。そしてそれからは、その女の人に追われるようになりました。会う度に。もう、普通の生活はしていられません。気の抜けない日々が続きました。
けれど、どうして追ってくるのか、という疑問が湧いてきました。
そこで勇気を出して、聞いてみる事にしました。
学校帰り。いつものように追ってきます。わたしは途中まで逃げて、立ち止り聞きました。
「どうしておってくるのですか？」
と。
「・・・・・・」
答えてくれません。しかし、聞こえているはずです。聞いた一瞬だけ、こちらを見ました。とても悲しい顔で。でも、どこか憂いのある顔でした。辛い、という感情がほんの少し流れてきました。
その後、霊などに詳しい人の話で、それは死神であるという事が分かりました。
そしてその1カ月後。家から見えるマンションの屋上にいたのを見

たのが最後に、すっかり追ってこなくなったのです。
そして更に１カ月後。部活の演奏会（わたし、吹奏楽部です）で、ステージで演奏していると・・・。目線の先の客席にポッカリと黒い空間がありました。よく見るとあの女の霊・・・、死神でした。
そして、それを境に見かけなくなりました。
本当にあれが死神だったのか、どうして追われていたのかは未だに分かりません。でも原因があるとすれば・・・。その頃は転校、家庭の問題がいろいろあったのです。辛くて、少しでも死にたいと思ってしまったからかもしれません。でも、ステージで演奏する私を見て、命を奪うことを諦めてくれたのかもしれません。
それでも。あの悲しい顔、憂いのある顔は忘れられません。流れてきた、感情も・・・。もしかしたら、死神にも誰かの命を奪うのには、抵抗があるのかもしれません。
死神様、ありがとうございました。
それからは、死神に対する見方が変わりました。

追われる（後書き）

お疲れさまでした。相変わらず、稚拙な文ですみません。
死神は不思議ですね。命を奪う神。けれどそれは、この世に必要なことなのかもしれません。生と死の上で。簡単に死にたいとか言うな、ということを教えられました。どんなに辛くても、生きていかなければならないのです。

小さな方々

今住んでいる家に住んでいる方々の話です。
幽霊じゃぁ、ないですよ。
実は・・・。小さい人たちが住んでいるのです！！・・・と、言っても分かりませんね（笑）
　では・・・紹介します。
体長・・・15～20センチメートル程
特徴・・・集団行動している。おしゃべり。ビビりな一面も。人と目が合うとビックリする。着物を着ている。
その他・・・女、男など性別がある。子供、お年寄り、若い、中年くらいなど。年がある。家族、独身などそれぞれ。
などです。背の高さなど以外は、生活は人間のようですね。嘘っぽいし、「なんだか頭おかしいんじゃないの？」と思う方もいると思いますが、本当です。信じる、信じないは勝手ですけど。
この方々は霊ではなく、こういう生き物なのです。小人、というべきでしょうか。この方たちとのエピソードを書きます。
　ある日、居間でくつろいでいると・・・。
「おい、こっちだ、こっち。急げ」
「待て。そう急かすな」
「とにかく。急がなければ」
わたしは、勇気を出して話しかけました。（ちなみに、その方々はどちらも男でした）
「ねえ、どうしたの？」
すると、驚いたように、
「わぁ。目が合った」
「ひイイイイイ」
と悲鳴を上げて逃げて行きました。逆に、私がビックリしてしまいました（笑）

信じるｏｒ信じてない

世の中、目には見えないものがたくさんいる・・・。
こう言われて、信じた人は、どのくらいいますか？たいていの人が、嘘っぽいと思うでしょう。
わたしは、信じるも、信じないもどちらも正しい、と思うのです。
見えていなければ分からないことがほとんどです。
「嘘つき」
こう言われる理由も納得できます。
自分が見えるからといって、他の霊感の強い人が見えるとは限りません。それだけ、不安定な世界なのです。私が見ているものは・・・。
時々、霊感をうらやましがる人もいます。しかし、そんなにいい事ばかりではありません。なんとなく、解ってくれる人なら良いけれど、場合によっては、ただの嘘つきですから。
けれど、１つだけいい事があります。それは、生きている人も、死んでいる人も、見える範囲ならだれとでも会話ができる事です。楽しいことじゃありませんか。出会いは奇跡、とよく言いますが、ほんとうにそれが実感できるのです。それらは、裏切ったり、感謝をしたり・・・。
めまぐるしい日々だけど、今日もそれを噛みしめ、生きています。

信じるｏｒ信じてない（後書き）

２日ほど、更新が滞りました。ごめんなさい。
相変わらず、稚拙な文だけど今書いたように、霊からも人からも学んだことが沢山あります。そんな出来事も折々出していきたいです。
そして皆さんにも少しでも多く、伝わればと思っています。
読んでくださって、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1252z/

見えてますか？聴こえてますか？

2011年12月11日14時58分発行